

藤丸立香は生霊である

主人公同士でもいいじゃない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終わった彼と途中の彼女の話。

目次

日常	1
日常 2	7
日常 3	13
日常 4	19

日常

いつからか、視線を感じるようになった。

体力をつけようと始めた訓練所でのランニングで。

見識を深めようと入り浸る図書室の奥で。

少しでも交流を深めようと通い詰める談話室で。

毎日の活力になっていいる食事をみんなでとる食堂で。

あと、ちようど今のように、レイシフトの報告をまとめたレポートを作っている夜の
マイルームでも。

——見られてる、よね。

サーヴァントたちの見透かすような目じゃない。

彼らはこんな伺うような目を向けない。

可愛い後輩のあこがれの眼じゃない。

彼女はこんな値踏みするような目を向けない。

職員たちの憐れむような目じゃない。

彼らはこんなあたたかな目を向けない。

ロマニやダヴィンチちゃんの見守るような目じゃない。

彼らはこんなじつくりと見続けない。

——誰なんだろ。

大穴でレフ教授。違う。

彼の見下す視線でもない。

——でも、知ってる人、だよな。

最初に視線を感じた時に、驚いたような気配があった。

それは大きな驚きではなくて、とても小さな驚きだった。

昔、文化祭で喫茶店をした際に給仕の一人として軽く化粧をされたことがあった。

その時鏡越しに自分で向けた視線に近い。

近しいものがこんなに変わるなんて知らなかったという。

意外さと驚きと、ちよつとした嬉しさ。そんな視線。

どこかむずがゆくなるような。

そんな視線を、鏡以外に向けられるのが少し不思議で。

——別に、何もされてないし。いいんだけど。

——せめて、顔だけ、とか。

どれだけ首を巡らせたところで、サーヴァントではない凡人の身では見えない視線の

主など探しようがない。

「寝ちやおつかな……」

——別に、嫌じゃないけれど。

手元のレポートに視線を落とす。

元々が高校生で、あまり身近じゃなかったレポート用紙にもずいぶんと見慣れてしまった。

そして、内容の稚拙さも変わりないという悲しさもある。

「これを、見られながら、書く、のは」

——少し。そう、少し、恥ずかしいものがある。

そのまま、パラパラと隣に積まれている束を手慰みに弄ぶ。

——資料。レイシフトした先の場所と、時代と、出遭った英雄たちの。

随分と溜まったものだと思う。以前は海の上だった。

——次がどこか、予想もしてみたけど。

どれも外れてしまって。歴史のターニングポイントと言われても、世界史に弱い立香には少し難しかった。

「……次」

——そう、次。きつと終わりではなくて。また、誰かに出会うの。

それは楽しみで、少しだけ不安で。

そういうえば、こんなことを考えるのは視線を感じてから随分と久しぶりのような気がした。

最近はずっと視線のことばかり考えていたから。そういつた不安とは、無縁でいられた。

——え、あれ？

違和感。というより、違和感がないのが、違和感になっている。

つまり、そう。これまでずっと、起きている間はずっと感じていた視線が——

——見られて、ない。

——消えちゃった？

「え、ええええ……う？」

突然、何の前触れもなく。それはいつも通りではあるのだけど、それにしたって、彼女がこうしてちゃんと視線を意識している間に消えてしまったのは初めてで。

少しだけ、呆気に取られてしまったのだ。



目を開けると広がるのは、白い部屋だ。

周りに集っていた幼女英霊たちを起こさないように、また諸事情で一際慎重に清姫から体を引きはがしてベッドから起き上がる。

彼は周回のご褒美としてせがまれて、魔力供給がてら一緒に眠っていただけなのが、なぜ人が増えているのか、なぜ微妙に自分も相手も服がはだけているのか、いい加減考えるのはやめていた。

特に、あの夢を見るようになってからは、あまり意識すると危ないと自覚して。

もちろん彼も、もしかしたらすでに、自身の貞操が危うさを通り越しているかもしれないという危惧は、あるのだけれど。

失った暖かさの代わりに、ぬくもりを求める感覚はわからなくもないから、意識しないだけに留めている。

「これはこれで、割ときついんだけど」

とある事情である程度発散はしているとしても、だ。

いい体をしているから、余計に。

かと言って口に出して迫ろうものなら顔を爆発させて気絶してしまうし。

「——先輩？」

「マシユ」

「……おはようございます」

——マシユ・キリエライト。可愛い後輩。頼もしい後輩。すでに戦う力はないけれど。

なぜか困った顔をしていても、それでも頼もしい後輩に、彼はいつも通り笑顔を浮かべる。

「おはよう」

そう返せることが奇跡のようなものだとは知っているから。

彼はもう己の言動が足りなかったと後悔はしたくないから。

伝えるべきことは、伝えなければ、と。

「今日もいい体をしてるねー」

さて、そんな彼の最近の悩みは。

なんだか最近、後輩に避けられていることである。

日常2

——納得いかない。

朝。日の光を感じなくなつて何度目かの、朝。

起きて食堂に向かう中、なぜかすれ違う数人がひきつった顔をして道を譲つて足早に去っていく。

目元に触れると、眈をつり上げているのがわかる。口元では、唇を突きだして。子供っぽいからやめようと思つていた癖。

——そもそも、最近は出てなかつた。

理由は、わかつてる。

——なんで、来ないの。

ずっと感じていた視線が急になくなった。むしろ喜んでいい事態のはずなのに。

藤丸立香は唇を尖らせて、眈をつり上げて怒つていた。

——いいけど、別に。

視線を気にしなくていいのなら、と。久しぶりに数少ない女性サーヴァントと交友を深めたりもした。何故か何度かため息を吐かれたりもしながら、楽しく。

ため息の理由は、最近はその女の子らしかったのに、という失礼なものだったけど。

——言われてみれば、本気でだらけたのは、ずいぶん久しぶりだったことに気づいて。そこで、ふと。その時の疑問がもう一度浮かんでくる。

「男の人、なのかな」

ピタリと足を止めて物思いに更ける。彼女を避けて、目の前の食堂へ人が行き来する。なんというか、視線の主は、度々視線が胸やお尻に走る。しかも割とじつくりと。舐め回す感じではなくて、ただじつくりと。

よくぞ実った、と言うような満足げな気配。

その奇妙な潔さが逆に腹立たしくも、いやらしさは感じなかった。

だからこそ、彼女は過度にだらけるのをやめてしまった。ひどく気恥ずかしくなってしまうから。

けれど、男なのだ、と意識したことはなくて。

一度見られなくなったからこそわかる、気の抜きやすさに、ようやく自覚していた。

——さすがに、お風呂とかで視線はないけど。

「……見られてない、よね？」

——信じたけれど、視線の動きからして。

——してもおかしくない、というか。

次に来たら必ず問い詰めようと心に決めて。

足音荒く食堂へ踏みいった。怒った頭の片隅でも、今日のご飯は何だろう、と考えながら。



食堂で食事に舌鼓を打つ。

昔、一時期味を感じられなくなっていた時も、欠かさず作ってくれた料理であることを思えば、より一層美味しい気がするし、米粒一つすら残す気がしない。

堪能して、席を立つ仲間達を尻目に食後のお茶を飲む。

本来なら、この時間に話しかけられることは少ない。

——今日は、そんなことないみたいだけど。

「あら、マスター。素敵な意匠ね」

頬に綺麗な紅葉を散らしているからか、今日はいつものより掛けられる声が増えていた。

青いタイトの槍兄貴とか、紫タイトのお師匠とか、半裸の巨漢とか。

——あとは、そう。目の前にいる幼い女神とか。

——彼女に関しては、いつものことだけど。

普段は全く話しかけようとしなない彼女は、こんなときばかりは絶対に見逃さないと寄ってくる。

クスクスと笑みをこぼす姿は幼いながらに艶やかだ。

本当に、可愛らしい少女の有り様で。

——夢の中の少女と、どこか、似ているような。

——まったく、似ていない、ような。

「似合うだろ？」

「ええ、ええ。とてもお似合いよ、マスター」

微かに嘲る笑みすら愛らしい。

——ずるい。とてもずるいのだ。

——言っても、女神だもの、などと返されて終わるのだろうけど。

——それならやつぱり、思った通りに。

「ありがとう。君は——」

——思った通りに、言うべき、なんだろうな。

「——君は、今日も可愛いね、ステンノ」

「あら、ありがとう。貴方に褒められるのは……久しぶりかしら」

——そんなことはない。絶対に。

——面と向かつて言うことがなくても。何度腕の中で、顔を見ないまま、褒め称えたことか。

——愛しい、女神。ステノ。

小さく細められた目に開こうとした口を閉じる。

「……難しいね」

直接的な言葉は、みんな割と嫌がるのだ。

人前だと、特に。彼女は、殊更に。

——ただの本音なのに。

そんなことを言ったところで、関係ないで一蹴されてしまうが。

『気遣いは前提に、けれど素直に率直に』を信条にしてからの日々は、彼の心の充足とは裏腹に、仲間たちとの距離を少し難しくしていくようで。

——いいこと、なんだけどな。

——世界の命運でなく、ただの人間関係に悩めるのは、きつといいことだ。

「それでは、私は行くわね、マスター」

「ああ、うん。今夜——」

——失言。まずい、やらかした、やってしまった。やばい。やばい。やばいやばい。

ギリギリのところまで口をつぐんでも、鋭くなった女神の視線からは逃れられない。

聞こえない素振りで去っていった彼女の、食堂から出る間際の視線を受けて、小さくため息を吐いた。

日常3

朝ごはんを食べて、数人のサーヴァントにやりきれない愚痴をこぼして。

眉間の皺がとれた頃、マシユからもドクターからも、疲れているようだから部屋で休むように言われてしまった。

——疲れてるのは、確かに、そう。

気を使わせてしまったことに罪悪感もある。

もしも次の特異点を発見したなら、休んでいようと呼ばれるだろうから。

——それなら別に、いい、よね。

とはいえ。それで何かしようとすぐに思えるほど趣味が多いわけではない。

「何しよう……」

——料理、は、今からはちよつと、無理だし。

——洗濯、は、済んじやってるし。

——掃除、とか？ うん、掃除。

既にマイルームは帰るだけの場所になってしまいかけているから、そろそろ模様替えの一つでもして、愛着を沸かせてみる、と言ってくれたのはダヴィンチちゃんだった。

——お言葉に甘えよっかな……。

「掃除用具、あるのかな」

『ばあ!』

硬直した。

『つて、見えないんだよな。いつもと同じに』

——え。ちよ、えっ？

部屋の中央で半透明の男が浮いている。

掃除用具を借りて、頭に三角巾を巻いて、エプロンを着けて。

水の入ったバケツときれいな雑巾を手に。準備を万全にして自室へ入ると。

突然近づいた誰かの顔で、彼女の視界が埋まってしまつて。

言葉を失う。

——私に対して、ちょうど頭で上下ひっくり返るようにして。

——男の、人が。

『しかし君は今日も鈍いな。その鈍さも、最近愛しく思えてはきたけど』

男の人が、じつと見ている。

なかなか、寂しいものがある、と。こぼしながら、じつとこちらを見ている。

——あ。

(いつもの視線だ)

——気づいてしまえば、すんと。私は、すぐに、落ち着いて。

「……あ」

驚いて口を開いたままだったせいで、のどがすっかり乾いていたから、一言さえ出せずに。もう一度。

「……あなた、誰？」

『……うん。見えてる？』

恐る恐る頷く立香に、男は——落ち着いて見れば、風貌は同じ年頃の少年だった——半透明のまま苦笑した。



——まさか残るとは思わなかった。

(ただの夢とは思ってなかったけどさ)

少女と初めて言葉を交わした後、幾らかの会話の末に悲鳴を上げてひっぱたかれた痕が、起きた後も残っていた。

夢でない可能性を、考えなければならない。既に数名が疑っている。

マシユ・キリエライトは、セクハラ発言を受けたらまず逃げる。彼に近づく女性サーヴァントたちは、今更頬を張ることもない。

ならば、それは一体誰につけられた痕だろうか、と。

疑って、探って、人によっては既に察して。

笑ったり、怪しんだり、怒ったり。

ごく稀には、笑いながら怒ったり。

人によっては、わざわざ部屋にまでやって来て、尋問のように心当たりを問い詰めてくる。

(聞かれたら、答えるけど)

——原因は、わからないし。そもそも信じられないと思う。

それでも聞かれるなら、それはもう。

——本人が満足してくれるまで、終わらない、んだよな。

「聞いているかしら、マスター？」

腹の上に跨がって、左手の指を目のすぐ下に当てられる。

弱々しい彼女が、少女のまま。藤丸立香を痛め付けるためのもの。

(向けられるのは、二度目か)

——一度目は、最初のときだ。

夜になって。いつも通りに訪れた少女は、一も二もなく藤丸立香を組み伏せた。

馬乗りになって、反対の手で赤みの引いた頬を撫でながら、蕩けるような笑みを浮かべる。董色の髪が流れるように頬を滑って白一色のベッドを彩った。

「楽しそうだね」

「ええ、ええ。愉しいわ、とても」

彼女は立香の頬に指を突き立てる。爪が短いから、抉るようにして。血は出ない。

——確かめるように触ってきた、少女の手を思い出す。

突き立てられた指先により一層の力がこもる。抉れてしまえと、美しい笑みをそのままに、目が、凍えて。

(あ、怒った……?)

——そんな有り様さえも、美しいと。

もちろん、本当に抉られてしまえば、そんなことを考えてなどいられないだろうが。態度が虚勢でも、思う心は本物だから。

そうなるまでは、思い続けてもいいだろう。

——左手にも力がこもって。

——彼女の顔が近づいて。

——暗くなる視界の中で。
——俺は、目を、閉じる。

日常4

「マスターF?」

「うん。知ってる?」

——マスターF、と半透明の彼は名乗った。

——けど、そんな名前の英雄に心当たりはなくて。

(知ってる人、いるかな)

考えて、まず出てきたのはダヴィンチちゃんだった。

——ダヴィンチちゃん。綺麗な人。中身が男性というのは、驚くけれど。

——そこまで誰かを好きになれるのは、すごいことだと思う。うん、本当に。

「うーん。該当するのがちよつと多すぎるかな。目立った特徴はあるかい?」

「えっ、と……」

——特徴、特徴……?

脳裏に思い描ける顔は、東洋人で、少し整ってて、同い年くらい。その程度のことしか彼女にはわからなくて。

(あとは、青い瞳とか……)

——そう、青い瞳。

——半透明の体で、一際目立った青の。

——日々を話す中で、眩しそうに細められる、目。

(……あれ?)

急に黙りこんでしまうダヴィンチちゃんに気づいて視線をあげると、驚いた目を向けられていた。

「……どうかした?」

「珍しいね。君が、そこまで英雄を気にするのは」

——いや、と続けて。

「君がちゃんと私たちを見るのは、初めてじゃないかな」

それは。

何か、どこかに、強く、刺さる言葉で。

咄嗟に返そうとしたのは何の言葉だったのか。

——私は目を逸らす。何だかダヴィンチちゃんを見られなくて。

——それが本当だと。私は知っているから、余計に。

「ちよつと、気になることが、あつて」

そんな言い訳じみた言葉を最後にして、逃げるように、藤丸立香は部屋を後にした。

これまでの旅の感想を訊ねられたなら。

夢のような時間だったのだと、藤丸立香は表現する。

—どこか、ふわふわと。

—浮き上がっている、ような。

バイトにやって来て、突然命の危機に陥って、見たこともない不可思議に次々と遭遇して、見知った人がいなくなつて、世界を救わないといけなくなつて。

まるで壮大な物語の始まりのような時間は、現実感が全く無いままで、実感を持つ前に進み続けるしかなくて。

—そうして、ずっと過ごしていたら、視線を感じるようになって。

—その本人と、会つて。

—ようやく、現実だと知つたのだ。

—眩しそうな彼の目を思い出す。

—現実感がなくても。

—夢のような時間でも。

—誰かが眩しく思う時間だと、教えられて。

(どんな人なんだろう)

そんな疑問を今までほとんど持たなかった自分が恥ずかしくもあった。

——みんなはここにいる。

そんな単純なことをようやく思い知った気になった。

(怖くて、悲しくて、恥ずかしくて)

ポロポロと彼の前で涙を流して、見られたくないから押し退けようとしたら、変なことを言われたから頬を叩いてしまつて。

子供のように、泣き疲れて眠るまで、泣いて。

——そんなこと、言えるわけないし。

——言わなくてもよかつた、よね。

言つても、困らせてしまつたろうし、誰かに言えるほど明確にはなつていなくて。

——ただ、きつと。

——今日、ようやく。始まつたのじゃないかと。

——勝手に、思つて。

——私は、目を、閉じる。



藤丸立香は夢を見る。

蟻になった夢を見る。

麗しの女神の指の上。気まぐれに導かれたその場所で、微睡む虫の夢を見る。

捕まれて、引き離されて、戻されて、愛でられる、長い夢。

彼女と眠る夜に、必ず見る夢を見て。

彼は今日も目を覚ます。

——…あ、さ。

部屋に日が射し込むことはないけれど、時計は朝を示している。

濡れている目を乱雑に拭って、寝台から起き上がった。

シャワーを浴びて、服を着る。

彼女はいなくなっている。

顔を合わせたとしても、常と変わらないままだろう。

いつものことだ。

(今日は、どこ行こうかな)

既に行かなければならない場所はなくなつて。

行きたい場所に、行けるようになって。

特異点でみんなで騒いだりもしながら。

楽しく、過ごして。

——いない人を、不意に思い出す。

いつものことだ。

それなのに、どうしても、慣れない。

「——っツ……!?!」

——チクリ、と。

小さな痛みが、ぬるりと。首筋を、這う。

昨夜に。小さな女神に引っ掛かれ、噛まれたそこから微かに血が垂れていた。

(今日も兄貴のところかな……)

もしくはみんなのオカンのところで、破魔系統の剣を借りてこないといけない。

マーキングのような微かな呪いを消さなければ、痛みが消えてくれないから。

——毎朝のことだ。

——いつものことだ。

——浮かびかけていた気の抜けた笑みが、かき消えて。

今日も生き延びたことを、思い出す。